リスニング学習方略獲得に向けた
オンライン COP の実践研究

立命館大学言語教育情報研究科修士２年　岡田悠佑
ll002996@lt.ritsumei.ac.jp

0.　はじめに

Lave & Wenger が 1991 年にその著書、”Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation”の中で、「実践共同体（Community of Practice / COP）」という概念を打ち出して以来、社会学から認知科学、ビジネス分野にまで広くその概念が適用されてきた。そして、外国語教育・第二言語習得論の中で、協働の学びの場としての実践共同体は、主に次の２つの側面から捉えられてきた。

1. 第二言語習得を社会文化的に捉えるひとつの「視点」として
2. 実践共同体での言語学習を促す、ひとつの「教授法」として

本発表ではこれら外国語教育・第二言語習得論の中で、実践共同体という概念がいかに捉えられ使用されてきたか､これまでの研究を整理するとともに、実践共同体での言語学習を促す「教授法」としてのあり方に注目し、その実践例のひとつとしてオンライン上に作られた、リスニングを学ぶ学習者達による実践共同体での実践を報告する。

1.　社会文化的アプローチとしての実践共同体

第二言語習得を社会文化的なものとして捉えた時、実践共同体への正統的周辺参加という概念をそこに当てはめることが出来る。例えば宮崎(2004)は、相撲界における外国人力士の日本語習得を、相撲界への正統的周辺参加の過程として研究している。このような、実践共同体への正統的周辺参加として第二言語習得を考える社会文化的視点は、第二言語の習得が実践共同体への十全的参加の第一義ではなく第二義的意味を持つもの、つまり副次的なスキルのひとつとして存在する時に可能である。これは、例えて言うならば、仕立屋における裁断・裁縫技術と同じレベルのものとして第二言語というスキルが在るということである。裁断・裁縫技術はそれがあるだけでは、仕立屋としては成り立たないが、それがなければ仕立屋ではないという必要条件のひとつである。同じように、日本語を使えるだけでは相撲取りではないが、日本語を使えるということは、相撲界への十全的参加（＝横綱や親方の立場）に欠かせない条件･要素なのである。

このように、実践共同体への十全的参加に向けた副次的なスキルのひとつとして、正統的周辺参加の過程で第二言語を習得するということへの説明、つまり外国語教育・第二言語習得論の社会文化的視点のひとつとして、実践共同体は捉えられている。

2.　教授法の視点からみた実践共同体

先のような、実践共同体への正統的周辺参加の過程での第二言語を習得するという社会文化的視点を応用すると、実践共同体を作り、そこへの正統的周辺参加の中で外国語・第二言語を学習・習得させるという､「教授法」としての実践共同体の捉え方が生まれる。

例えば、Zhao(1996)は、英語のネイティブとそれに近い英語学習者を実践共同体の中心に据え、そこに初級の学習者などが周辺から参加し、初級者と上級者、ネイティブとの協同作業の中でコミュニケーション能力を徐々に獲得していくというネットワーク上のシステム、EX･CHANGE を開発した。そこでの実践とは EX･CHANGE を用いた書き言葉による

コミュニケーションであり、初級者の作文による実践共同体でのコミュニケーションに、ネイティブや上級の学習者が手を貸しながら、徐々に初級者を実践共同体への十全的参加（＝ネイティブや上級の学習者並にコミュニケーションが出来る状態）に近づけていこうとするものであった。

しかし、この EX･CHANGE の成果は具体的には報告されておらず、その後に続く発表などもない。また、Zhao(1996)の他に、Haneda(1997)などが教授法としての実践共同体を報告しているものの、そこには竹内(近刊)の指摘するように、「客観的データによる裏付けが不足している」などの問題がある。

これらの「教授法」としての実践共同体の成果があまり芳しくないことの理由としては、実践共同体としての「領域」が以下のような原因によって定まっていないため、と考えられる。

1. 実践共同体に対する「実践の星座」という概念が抜け落ちていること
2. 正統的周辺参加の起こる場という考えに重点が置かれていること

3. 実践の星座と実践共同体

Wenger(1998) は、実践の星座 (Constellations of Practice)を形容して、次のように述べている。

“Some configurations are too far removed from the scope of engagements of participants, too broad, too diverse, or too diffuse to be usefully treated as single community of practice” (pp126-127).

この”some configurations”こそが「実践の星座」である。

つまり「実践の星座」とは、実践共同体よりも、「緩やかな結びつき」（下平, 2001）であり、多数の実践共同体を含む大きな外枠と考えられる。

朝尾(2003)の例にある、噺家という協働の学びの場を取って考えてみると、これは数ある職業の中のひとつの職種である。「噺家」という職種の上には「お笑い」という職種があり、更にその上には「芸能」という職業が存在する。この括弧で括られたものは全て実践共同体と見ることができるが、大きな枠組になるにつれ、それを単一の実践共同体と見ることは難しくなる。例えば、「芸能」という広く大きな実践共同体で正統的に周辺から参加していく、ということの具体的な行動(正統的、周辺的、参加という言葉が指す具体的なもの)を考えることは困難である。よってこれらは単一の、「領域」の絞られた実践共同体を含む大きな括り、つまり「実践の星座」なのである。

このような概念の下では、英語学習という括りは、その中に多数の実践共同体を含む、「実践の星座」であると考えられる。例えば、TOEFL をマスターしたい人の実践共同体や、更に狭く TOEFL の Writing セクションをマスターしたい人の実践共同体が存在する。または、旅行英会話を学習したい人の実践共同体などもある。英語学習という括りは、その中に実に様々な実践共同体を含む大きな外枠なのである。

このような「実践の星座」では、実践共同体と違い、学習者は何処から何に手をつけて参加すればよいのか分からない。

このように、大まかな枠組みで実践共同体を捉え、実際には「実践の星座」となっていたことが、これまでの教授法としての実践共同体研究の失敗原因のひとつである。

4. 正統的周辺参加の場から実践共同体が生み出す価値へ

このように、実践共同体としての「領域」が絞り決めず、「実践の星座」になってしまうことには、正統的周辺参加という概念に重点が置かれ、そこで教授法としての考え＝実践共同体という学びの場のデザインが終了してしまっている、という原因も考えられる。

正統的周辺参加論自体は、Lave & Wenger(1991)の言うとおり、“a pedagogical strategy or a teaching technique” ではなく、”an analytical viewpoint on learning, a way of understanding learning”なのである。

正統的周辺参加の過程での学習という概念は重要だが、それだけでは、実践共同体を、真ん中に十全的参加者がいて、そこに初心者や新参者が正統的且

つ周辺的に参加するもの、という捉え方だけで終わってしまう。実際の実践共同体とは、その実践の結果として何か価値を生み出し、その価値を生み出す過程で正統的周辺参加による学習が起こるものなのである。つまり、今までの教授法としての実践共同体研究は、朝尾(2003)の言う、「意味のある場面での意味のある言語活動」という視点が抜けていることが問題なのである。例えば、TOEFL の Writing セクションをマスターしたい学習者は、TOEFL の Writing セクションを学ぶ人たちの実践共同体に参加することによって学びが生じるのであり、旅行英会話を学ぶ人たちの実践共同体では意味が無く、参加することも無いので、正統的周辺参加としての学習は起こらない。

このように学習者に取って、実践共同体が持つ、または生み出す価値が意味のあるものでなければ実践共同体としては成り立たない。学習者が、実践共同体の生み出す価値に興味を持ち、そこでの正統的周辺参加を通して、第一義的には目標とする言語能力、そして副次的にはその言語能力を支える専門的知識＝言語スキルを学んでいくのである。

Haneda(1997)のように、クラスを単一の実践共同体として捉えた場合、その実践共同体の生み出す価値というものが明らかでない場合が多く、正統的周辺参加としての学習が起こっているのかどうかも明らかにはならないのである。

5. オンラインリスニング学習コミュニティ -まとめにかえて-

以上に見てきたような教授法としての実践共同体の問題点、つまり、実践の星座という概念が抜けていたこと、正統的周辺参加に重点を置きすぎ、その実践共同体が生み出す価値、つまり「意味のある場面での意味のある言語活動（朝尾, 2003）」という視点が抜けていたこと、を踏まえ、「教授法としての実践共同体」のあるべき姿の実践例として、オンライン上に一方的な、資格試験などのリスニングを学習する学生による実践共同体を作った。

そこでは、第一義目標として、リスニング成功者になること、そして副次的なものとして、リスニングの聞き方、リスニングストラテジーを身に付けることを目標にしている。

具体的には、weblog ツールを使用してオンライン上に学習者の学習コミュニティ＝実践共同体を作り、各自がオンライン上の英語リスニング教材を使用し、その使用時の感想を Vandergrift(1999)のパフォーマンスチェックリストを基に、日記のように、学習した結果と感想を weblog に書き込んでいくというものである。ここでは、オンライン上の教材の学習と weblog への書き込み、相互参照、ディスカッションが実践（＝参加）であり、weblog を媒介にした実践共同体が作られている。

このオンライン実践共同体での実践結果については、現在分析中であるため、発表の場で改めて報告させていただきたい。

参考文献

朝尾　幸次郎 (2003). 「教えない」という仕事もある!? 『英語教育』, *52* (2), 11-13.

下平　菜穂. (2001). 実践共同体としての日本語クラスに関する一考察 『日本語教育論集』, *17*, 77-96.

竹内　理 (1998). コンピュータ・ネットワーク利用の外国語教育：その理論的背景と問題点 『LLA 関西支部研究集録』, *7*, 29-48.

竹内　理 近刊. メディアの利用と第二言語習得（第 14 章）『入門セミナー：最新の第二言語習得研究と英語教育（仮題）』 小池生夫（監修）東京：大修館書店

宮崎　里司 (2004) 正統的周辺参加論からみた外国人力士の日本語習得家庭 『2004 年度日本語教育学会春季大会発表論文集』179-184.

Haneda, M. (1997). Second language learning in a ‘community of practice’; A case study of adult Japanese learners. *The Canadian Modern Language Review, 54* (1), 11-27.

Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. New York:

Cambridge University Press. 佐伯胖訳. (1993). 『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』東京：産業図書.

Vandergrift, L. (1999). Facilitating Second Language Listening Comprehension: Acquiring Successful Strategies. *ELT Journal*, *53* (3), 168-76.

Wenger, E. (1998). *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity.* New York: Cambridge University Press.

Wenger, E. & Snyder, W. (2001). Communities of practice : The organizational frontier. Harvard business press (ed.) *Harvard business review on organizational learning*. Boston: Harvard Business School Press. 1-20.

Wenger, E.; McDermott, R.; & Snyder, W. M. (2002). *Cultivating Community of Practice*. Boston: Harvard Business School Press. 櫻井祐子訳. (2002). 『コミュニティ･オブ･プラクティス：ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』東京：翔泳社.

Zhao, Y. (1996). Language Learning on the World Wide Web: Toward a Framework of Network Based CALL *CALICO Journal*, *14* (1), 37-51.